

聖書：創世記6：1～8

説教題：しかし、ノアは

日時：2020年2月23日（夕拝）

この創世記は、神がこの世界をいかに素晴らしく造られたかという記事から始まりましたが、その後、最初の人間アダムとエバの罪によって、今度はいかに深刻な影響が世界にもたらされるようになったかについて記して来ました。その「罪」は世代を重ねて子孫に受け継がれるたびごとに一層威力を増し、人類を益々嘆きと悲慘の中に投げ入れて来ました。そしてそれがついに一つの頂点に達したというのが今夕の創世記6章前半の記事です。5節を見ると、「主は、地上に人の悪が増大し、その心に凶ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になった」とあります。ここに罪が当時の世界をどのように覆っていたかが、これまでにない強い言い方でいくつか語られています。一つ目は「地上に人の悪が増大し」。エデンの園でなされた一つの罪は今やどんどん地上に広がり、もはや手の施しようがないほどにこの世界に満ちてしまった。二つ目は「その心に凶ることが」。外側に現れた行動だけが悪だったのではなく、むしろ人間の内側から、その心から、すべての悪は湧き出ていました。三つ目は「いつも」。一時的に悪が膨れ上がったのではなく、絶えず、常時、途切れることなく。そして四つ目は「みな、・・悪に傾く」。良いことと悪いこととのバランの中で悪いことの方が上回っていたというのではなく、すべてが悪に傾いていた。このためについに次回以降見る「ノアの洪水」のさばきが、この世界に下されなければならなくなります。それにしてもどうしてこんなにも急速にこの時代に「悪」が地上を覆い尽くすようになったのでしょうか。それを説明するのが1～4節の部分です。

そこに「神の子ら」と「人の娘たち」の結婚のことが記されています。この「神の子ら」とは誰のことなのでしょう。また「人の娘たち」とは誰のことなのでしょう。これは聖書の中でも最も難解な箇所の一つとされる部分で、注解者によって意見は分かれています。色々言われて来ましたが、大きくまとめると次の三つの見方があるようです。一つ目は、この「神の子ら」は「天使たち」を指しているという理解です。ある神の子ら、すなわち天使たちが人間の女性と結婚した。これによって4節に出て来るネフィリムが生まれた。通常の人間のレベルを超えた特別の勇士たちが、これによって誕生した。これと似た古代神話は色々あるようです。しかしここをこのように解釈するにはいくつか難点があります。一つはイエス様がマタイの福音書22章30節で「復活の時に

は人はめとることも嫁ぐこともなく、天の御使いたちのようです」と語っておられるように、天使が結婚生活を送ること、また性的機能を持つという考えは聖書と相容れないことです。もう一つの問題は、もし神の子らが天使たちであるなら、この天使たちこそ悪を増大させた張本人なわけですから、彼らに一番のさばきが下されなければならないはずです。ところが3節に記されていること、また続くノアの洪水に示されていますように、さばきは人間に対してのみ下されています。このことは「神の子ら」を人間の中のある人たちとして解釈すべきことを示すのではないのでしょうか。

2つ目の見方は、この「神の子ら」とは人間の中の位が高い人、王的貴族や君主などを指すというものです。4章23節でカインの子孫のレメクは自分の力強さを誇りました。二人の妻をめとり、私が受ける傷のためには一人の人を殺すと豪語しました。そのようにして人々を支配し、人々の上に君臨するような支配者たちを指すという見方です。そういう高い地位にいる「神の子ら」、王的存在が好きな女をほしいままに妻にした。いわばハーレムの状態を作った。これがこの世の一層の墮落を招いたということです。しかしここで突然、王たちや君主たちが「神の子ら」という言葉で出て来ることは唐突な感じがしますし、文脈的に説得力に欠けるように思われます。

三つ目は伝統的な見方ですが、この「神の子ら」とはセツ系の子孫を指すというものです。これまで創世記はカインの子孫とセツの子孫が対照される仕方でも書き進められて来ました。セツの子孫は神を礼拝する民として、カインの子孫とは対照的な人々として記されて来ました。その敬虔な流れに属する人たちのことがここで「神の子ら」と言われていると理解するものです。これ以後もモーセ五書において神の民を神の子ら、神の子どもたちと表現する仕方は何度となく出て来ます。その敬虔な流れに属する神の子らが、ここで人の娘たちが美しいのを見て、思いのまま結結婚するようになった。この「人の娘たち」とは、セツの子孫とは対照的なカインの流れに属する女たちのことだと解釈する人たちもいますが、6章1節に出て来る「人」は人間全体を指していますので、続く2節の「人の娘たち」も、カインの子孫に限らず、すべての人間を含めて考えるのが良いように思います。これまで神への礼拝で特徴づけられてきたセツ系の子孫も、相手がどんな人であるかに関わらず、ただ美しいという点だけを見て、思いのまま結婚するようになったということをこれは言っているように思われます。

2節は明らかに好ましくない姿として書かれています。これはエデンの園におけるエ

バの姿を思い起こさせます。エバは禁じられた木の実を欲望の目で見つめた時、それは食べるのに好ましく思われ、そういう思いで手を伸ばして取って食べました。ここでも神の子らは、自分の目に良いと思う者を、美しいからと言って妻にしました。本来、結婚は神を敬い、神に与えられた使命をより良く地上で果たすために、一組の男女が互いに支え合い、慰め合い、強め合うために定められたものです。ところがそんな神の御思いはそっちのけで、ただ自分がその人を好きだから、美しいから、自分のものにしたいからという欲望だけで結婚がなされています。このことがノアの洪水に至る世界の一層の墮落を引き起こしたということです。

そこで主は3節で「わたしの霊は、人のうちに永久にとどまることはない。人は肉にすぎないからだ。だから、人の齢は百二十年にしよう。」と言われました。ここに神を敬う心を捨て、ただ肉欲を追い求める状態に落ちた人間のことが語られています。120年は、新改訳のように人間の寿命を指すという理解もありますが、洪水のさばきが行われるまでの猶予期間を指すと取る理解もあります。これも学者によって意見は分かれています。

では4節のネフィリムはどう考えたら良いのでしょうか。注意して読むべきは、ここで神の子らと人の娘たちの結婚によってネフィリムが誕生したとは言われていないことです。神の子らと人の娘たちが結婚し、彼らに子ができた頃、そこにネフィリムがいたと言われているだけです。またその後もいたと言われているだけです。ではなぜこの両者のことがここで述べられているのでしょうか。ここでネフィリムのことが述べられているのは、彼らの存在が「地上に人の悪が増大し」というこの時代の状況に深く関係していたからでしょう。しかし問題はなぜ前から存在していた彼らが、今この時になって急に大きな影響力を持つようになったのかということです。その理由として創世記が述べていることは、「神の子ら」のあるべきところから外れた結婚であったということなのではないでしょうか。彼らがそれまでのように信仰に堅く踏みとどまる生活をしていれば、たとえネフィリムが地上に存在していても、彼らは地の塩として、この世界の防腐剤としての役割を果たすことができた。しかし今や神に従うよりも自分の思いを優先し、自分の欲するままに結婚するようになった結果、彼らは聖なる塩気を失ったのです。その彼らの道徳的腐敗がネフィリムたちによって暴虐が一層地にはびこりやすい土壌を提供したのです。地上の悪が加速することにむしろ加担する役割さえ果たしてしまった。このことは結婚の重大さを改めて私たちに教えてくれるものではないでしょうか。

結婚が神への正しい信仰に基づいてなされない時、当然その結婚から作られて行く家庭も神から離れて行き、やがて社会全体も益々神から離れて行くことへと至る。結婚を支配している神の原則が破られる時、いかに一気に悪への門戸が開かれ、社会が腐敗化するかということを、この洪水前の記事は私たちに教訓として教えているのではないでしょう。

こうして当時の世界は洪水のさばきへと向かって行きます。主はこのことに関して悔やみ、心を痛めたと記されています。そして7節のように言われました。「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜や這うもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを造ったことを悔やむ。」しばしばこのような箇所から神も後悔することがあるのか。神も失敗することがあるのか。このことは神も必ずしも全知全能ではないことを意味しているのかなどと言われる時がありますが、そうではありません。Iサムエル15章29節：「実に、イスラエルの栄光である方は、偽ることもなく、悔やむこともない。この方は人間ではないので、悔やむことがない。」民数記23章19節：「神は人ではないから、偽りを言うことがない。人の子ではないから、悔いることがない。」今日の箇所にある「悔いた」とか「心を痛めた」という表現は、あくまで私たち人間になぞらえた言い方に過ぎません。神はこのことを確かに悲しまれ、心から残念に思われた。そのことを強調して表現するための言い方です。神は全能者ではありますが、だからと言って何が起きてても何とも思わないという方ではない。神は超越者ではありますが、それにもかかわらず私たちの姿一つ一つを見て本当に悲しまれるお方なのです。私たちは7節のように語られた主のお気持ちを本当に理解できるでしょうか。せっかく良いものとしてご自分が造られたものを、神はご自分の手で滅ぼさなければならぬのです。これは決して造って見たら思う通りに行かないから、さっさと壊してしまえ！というような態度とは程遠いものです。私たちはこの神の苦悩に満ちた言葉によく聞いて、人間が神に対して犯した罪の大きさをよくよく感じ取る必要があるのではないのでしょうか。

しかしそんな中、最後の8節にこう記されています。「しかし、ノアは主の心にながっていた。」ここに一点の光があります。全てが悪に傾く中、「しかし」という言葉がここにあります。これまでのすべてを引っ繰り返す力を持つ言葉です。こんな世にただ一人、違う歩みをしていた人がいた。彼について「ノアは主の心にながっていた」と言われています。原文では「主の目に」という表現が使われています。当時の世界は主が

見るところ、すべてが悪でした。主はそれを見て心痛めておられました。しかしその主の目に良しと見える人が一人いた。彼について9節にこのように記されています。「ノアは正しい人で、彼の世代の中にあって全き人であった」と。これはもちろん彼が完全無欠な人間であったという意味ではありません。彼も罪人の一人です。その彼について「ノアは神とともに歩んだ」とも書かれています。これは前回見た5章24節の、死なないうで天へと引き上げられたエノクと同じです。ノアは足りないところが勿論たくさんあったでしょうけれども、それでもその生涯は「神とともに歩んだ」とまとめられる生涯でした。神と歩調を合わせるかのように、二人三脚で進むかのような生涯でした。その彼は主の目に良し！と映る人だったのです。そして実は8節の「主の心になんていた」という言葉の「なんていた」と訳されている部分は、直訳すると「恵みを見出した」という表現になっています。口語訳聖書は8節をこのように訳しています。「しかし、ノアは主の前に恵みを得た。」つまりノアは人間の力で頑張って正しく歩いて、主から良しという評価を勝ち取ったのではないのです。ノアは主の恵みに生きていました。その恵みによって、9節に書いてある生き方ができたのです。そしてそういう彼がこの後の人類の光となり、この世界に対する神の恵みの計画が前進することのために尊く用いられる器となるのです。

今後、このノアの具体的な姿を見て行くことになりますが、私たちは9節のノアに関する言葉を見てどう思うのでしょうか。自分には到底無理だと思うのでしょうか。しかし8節が示していることは、ノアは神の恵みに生きていたということです。そして神の恵みによるなら、人は9節のように生きることができるということです。今日も地上に人の悪が増大しています。あらゆる悪が世界全体に蔓延しています。そんな世に住む私たちはそんな世に流されるしかないように思うかもしれません。自分は非力で、いくら頑張っても世から様々な影響を受けて、結局はその流れに飲み込まれて行くしかないのでは？と悲観的な気持ちが先に立つかもしれません。しかしそうではない生き方ができる！ということはこの箇所は語っています。ノアがただ一人、世界がみな悪に傾く中でも主の恵みに生き、正しい歩みへと向かったように、私たちも私たちに恵みを与えてくださる神を仰ぎ、神の力によって神に喜ばれる正しい歩みへと進む者にさせていただきたいと思います。取り巻く環境がどのようなものであろうと、それに一緒に流されて行く者ではなく、神の恵みに強められて、神に喜ばれる歩みをささげる者とされ、この世界に対する神の恵みの計画が推し進められるために用いられる歩みへ導かれて行きたいと思います。